

# 子どもの職業意識（１）やりたい「しごと」の規定因

## － JELS2003報告 －

寺崎里水（お茶の水女子大学大学院）

### □職業意識という課題

子どもがどのような職業意識をもっているかという問題は、職業達成志向を高めることが、学校にコミットし、よい成績をとろうとする教育達成へのアスピレーションにつながるという意味で、教育社会学において従来関心がもたれてきた。近年、この前提に揺らぎが生じている。

荒牧（2001）は高校生の希望する職業の社会的地位の高低によって彼らの職業アスピレーションを解釈することが、「何よりも社会経済的な地位を求めて職業を選ぶ」という状況においてのみ妥当であると述べ、現代の高校生は社会経済的な地位達成志向とは別の基準によって職業を希望する者が増加していること、職業希望は進路希望の場合に比べて学校タイプとの序列的対応関係が弱いことを指摘した。職業希望と学校タイプの序列的関連が弱まっているということはすなわち教育達成と職業達成とが切り離されるといふことであり、彼らの将来における社会的な位置取りに関して、よりダイレクトに社会構造の規定力が働く可能性があるということである。

また、耳塚（2001）は、進路多様校といわれる高校の進路指導場面において、進路未定の生徒でも希望がなければ強いて就職先へと押し込めようとはしない、非現実的な職業志望であっても生徒の希望を尊重する、保護者が子どものフリーター志望を認めていれば学校は積極的に指導しない、といった傾向がうかがえると指摘した。そして、生徒たちの内発的な進路意識の高まりに期待し、各々の「個性的な進路選択」を尊重する近年の傾向は、結果的ではあれ、「進路未定」や「フリーター」を正当化する方向につながっていると結論づけたのである。

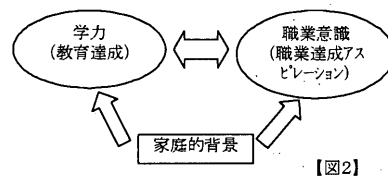
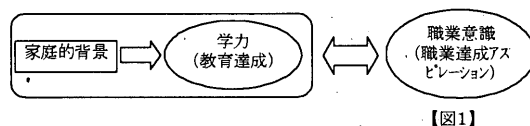
田中（2000）は、高校の進路指導場面におけるこのような傾向について、業績主義的な競争（＝何よりも社会経済的な地位達成を求めて職業を選ぶ）とは別の価値観（＝興味・関心）にそって進路選択をさせることが、果たして彼ら

の将来にとって望ましいことであるかどうかを検討されなければならないと主張している。

子どもの職業意識に関して、近年、教育達成と職業達成との結びつきが薄くなり、かつ進路選択や職業選択についての学校の規定力が弱まっているとするなら、職業意識がどのように社会構造に規定されているのかについて検討することは重要な課題である。本報告が目的とするのは、教育達成と職業達成との関係が実際どのようなものであるかについて、子どものやりたい「しごと」を手がかりに分析し、そこにどのような問題が見いだされるのかを考察することである。

### □データ

これまで教育社会学は、教育達成と家庭的背景との関係については熱心に考察を行ってきたが、職業意識（職業達成アスピレーション）については、教育達成との関連で論じることはあっても、家庭的背景との関連はさほど問うてこなかった（図1）。「いい成績をとって、いい大学に行き、いい会社に入る」という地位達成のあり方が自明であったため、誰がいい成績をとるのかということに敏感でありさえすればよかったのである。しかし上述の事柄に加えて、多くの若年失業研究が明らかにしているように、近年、いい大学に入ることは必ずしも職業達成に結びつくとは限らず、そもそもいい成績をとるための競争に参加しない者も現れている。そこで本報告では、①家庭的背景が学力と職業意



識（職業達成アスピレーション）に及ぼす影響はどのようなものであるか、②学力と職業意識（職業達成アスピレーション）との関係がどのようなかについて、分析することにする（図2）。

本研究で用いるデータは、お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラムの一環として行われている追跡調査 Japan Education Longitudinal Study 2003 (JELS2003) によるものである。JELS2003 は、日本の青少年の、学力・能力、アスピレーション、進路・職業生活の統計的ポートレートを手に入れることを目的に、お茶の水女子大学 21 世紀 COE プロジェクト「誕生から死までの人間発達科学」プロジェクトⅢ「子どもから成人へのトランジションに及ぼす社会・文化的要因の探求」によって実施された縦断的調査研究である。

本報告では A エリアの小学校 6 年生と中学校 3 年生を対象に分析を行う。児童・生徒質問紙調査、国語学力調査、算数・数学学力調査 (AT) をすべて受験し、かつ 3 種類をマッチングできた者を対象とした。ここでは職業意識（職業達成アスピレーション）として、子どもが回答した将来やりたい「しごと」を採用し、これに SSM の職業威信スコアをあてはめることで、アスピレーションの強弱を測ることにした。調査対象者のやりたい「しごと」に関する回答状況は図 1 のとおりで、実際に職業分類を行い、SSM の職業威信スコアを当てはめることができたのは小 6 では 538 ケース、中 3 では 278 ケースとなった。

図表1 将来やりたいしごとに対する回答状況

	小6	中3
何かしら答えあり	73.3	68.5
未定・何もしたくない	5.3	7.5
分類不能	1.1	0.2
無回答	20.3	23.8
計	100.0	100.0
N	843	558

(JELS2003)

## □分析

子どものやりたい「しごと」について、職業威信スコアの平均をとったところ、小 6 男子 64.1、女子 58.5、全体 61.2、中 3 男子 63.6、女子 58.8、全体 60.7 となった。小 6、中 3 ともに女子よりも男子のほうが職業威信スコアの平均が高い。

成績の自己認識別では、小 6、中 3 とも、「上のほう」で職業威信スコアの平均が高く、「下

のほう」で低いという傾向がうかがえる。

図表2 成績の自己認識別

	小6		中3	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
上のほう	66.57	10.16	63.43	11.81
真ん中より上	63.81	11.33	61.52	10.38
真ん中	60.07	10.69	61.41	9.87
真ん中より下	58.22	10.53	57.78	9.68
下のほう	57.62	11.14	59.51	9.91

(JELS2003)

両親の学歴別にみたところ、小 6、中 3 とも、「両親大卒」の平均がもっとも高い。

図表3 両親の学歴別

	小6		中3	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
両親大卒	63.60	11.39	61.71	11.45
どちらかが大卒	51.93	10.61	62.32	9.92
それ以外	59.95	10.86	59.18	9.50

(JELS2003)

受験塾に通塾しているかどうかをみたところ、通塾者と非通塾者の差は中 3 よりも小 6 で大きくなっていった。

図表4 受験塾通塾／非通塾

	小6		中3	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
受験塾通塾	65.05	11.60	61.39	9.30
受験塾非通塾	60.58	10.84	59.54	10.80

(JELS2003)

※発表は当日配布レジュメに沿って行います。

## ◇引用・参考文献

- 荒牧草平 2001 「高校生にとっての職業希望」尾嶋史章編著『現代高校生の計量社会学』ミネルヴァ書房
- 久木元真吾 2003 「やりたいこと」という論理『ソシオロジ』148号
- 耳塚寛明編 2000 『高卒無業者の教育社会学的研究』平成 11～12 年度科学研究費補助金報告書
- 宮本みち子 2002、『若者が《社会的弱者》に転落する』洋泉社新書
- 労働政策研究・研修機構 2004 『Business Labor Trend 2004.7 キャリア教育に求められるもの』
- 田中萬年 2002 『生きること・働くこと・学ぶこと』燭台社
- 田中葉 2000 「総合学科における科目選択・進路選択」『教育制度学研究』第 7 号
- 寺崎里水・中島ゆり 2005 「小・中学生の「やりたいしごと」」『JELS 第 4 集 細分析論文集(1)』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間発達科学専攻 COE